

強度行動障害支援特化チームの取り組み —今、そしてこれから—

姫路市立障害者支援センター
主任支援員 中川明美

【はじめに】

姫路市立障害者支援センター（以下「当センター」という。）は、自立訓練、就労移行、就労継続支援 B 型、生活介護の通所の多機能型事業所である。生活介護は障害特性や知的レベルに応じて、3 班に分かれており、激しい行動障害がある方も各班に分かれて所属している。

当センターの生活介護では、公立施設として激しい行動障害のある利用者を受け入れる役割があると考え、45 名中 37 名（令和 4 年 8 月現在）が「重度障害者支援加算」の要件を満たす、行動関連項目の行動障害の点数が 10 点以上の利用者であり、全体の 8 割を占めている。

強度行動障害のある方の支援は一筋縄ではいかず、基本的な知識や技術はもちろんのこと、本人との関係づくりの難しさや、気分の変調などの変化を察知する力、ノンバーバルコミュニケーションの活用など、長年に渡る地道な取り組みが必要である。

しかし実際の現場では、強度行動障害のある方だけに集中して向き合うことは難しいのが現状である。さらに、職員の異動や退職などに伴い、関わる職員が 1 年単位で変わることもあり、年度がかわると、一から関係づくりを始めなければならないこともある。そんな中で、支援の難しさを感じながらも職員体制に限界があるため、支援が停滞してしまったり、自傷他害による本人や職員のケガが増えたり、マンツーマン対応の環境が虐待行為を誘発しやすいものになってしまったり、そして対応できる職員が限られていくことによる一職員の精神的負担が増してしまうといった悪

循環になっていた。

こういった課題を改善し、利用者本人も職員も安心して充実した生活を送れるようになるにはどうしたらよいか、という思いから、強度行動障害支援に集中して向き合える環境を整えた、強度行動障害支援特化チームを生活介護の中に創設するに至った。

【強度行動障害支援特化チームの創設】

令和 3 年度から特に激しい強度行動障害の方へのチーム支援が提供できるような体制づくりを試行的に実施してきた。そして、令和 4 年度から、強度行動障害支援特化チーム（以下、「特化チーム」という。）を創設した。特化チームとは、激しい自傷他害など強度行動障害のある特定の利用者 5 名を対象に、構造化された環境の中で、特定の職員 5 名による一貫した支援を行うチームである。これまでの課題を少しでも改善できるように、強度行動障害のある方と徹底的に向き合う、利用者や職員のケガの防止、マンツーマン対応による虐待の防止、職員の精神的な負担の軽減、そして何より利用者が十分な支援体制の中で安心して過ごせることを目指している。

利用者数…5 名、職員数…5 名

場所…3 名は 1 室で同じ部屋、2 名はその他 10 名が活動する集団の部屋。

特に今回は特化チームの利用者 5 名の中でも、同じ部屋で活動することになる 3 名について報告したい。

【構造化とグループダイナミクスの 2 本柱】

特化チームを始めるにあたって、まずは空

間、時間の環境を整えた。また、個別行動ではなく、3名の小集団で行動し、お互いに影響を与え合うグループダイナミクスの力を活用した。

空間の構造化

シンプルに作業机、棚、休憩用ソファのみを配置し、パーティションで3名それぞれ個別の空間に区切り、周りの情報を統制した。

隣の部屋との壁にあった、ガラス窓には目線の高さに目隠しシートを貼り、余計な情報が入らないように環境を整えた。また、隣の部屋と音が混ざらないように、壁の窓には発泡スチロールを入れた上で、ベニヤ板で窓をふさいで防音した。



写真1 空間の構造化

時間の構造化、習慣化

対象利用者の知的レベルや発達段階から考えると、言葉での伝達理解や写真カード等は識別も難しいことから、スケジュールは視覚支援ではなくチャイムの音で区切った。作

業時間は集中できるように無音にし、休憩時間はソファでゆっくりできるようにリラックス音楽を流すなど、音で時間を切り替えるようにした。

また、作業時間については集中が続く45分間で区切り、休憩時間の15分間と合わせて3セットを組み立てた。(表1)

8:45~9:00	登所、更衣
9:00~9:45	朝礼、ラジオ体操、作業①
9:45~10:00	休憩
10:00~10:45	作業②
10:45~11:00	休憩
11:00~11:45	作業③
11:45~13:15	昼食、休憩
13:15~14:00	活動プログラム
14:00~14:15	休憩
14:15~15:30	山登り
15:30~15:40	リラクゼーション
15:40~16:00	更衣、降所準備
16:00~16:05	終礼、降所

表1 スケジュール

毎日同じ日課を繰り返すことで、生活リズムを安定させ、見通しをもって生活できることを目指した。情緒の波があり、作業に取り組めない時もあるが、どんなに気持ちが崩れていても基本的にはスケジュール通り過ごすことを目指して、気持ちの切り替えを図る工夫をしている。

午前には作業、午後からは他の15名程度の班と一緒に音楽やレクリエーションなどの活動プログラムに参加、その後、3名で往復約3kmの山登りを日課としている。他班の通常のプログラム編成よりも空き時間をなくして密にスケジュールを組んでいる。空き時間が苦手だということ、肥満傾向があることも含め、心身のエネルギーを発散できる時間を確保したいため、このようなスケジュールを立てた。

山登りで運動をしてエネルギーを発散させた後は、心身ともにクールダウンできるリラクゼーションの時間を取り、家庭に帰る前に気持ちを整えてもらった。

グループダイナミクス

構造化で環境を整えた上で、3名の小集団で一日の日課を送る、集団の力を活用したグループダイナミクスの方法を取り入れた。「グループダイナミクス」とは心理学者のクルト・レヴィンによって研究された集団力学のことで、集団において人の行動や思考は、集団から影響を受け、また、集団に対しても影響を与えるというような集団特性のことを指す。

これまでは、行動障害などが理由で個別対応することが多かったため、タイミングがずれると所属する班のスケジュールでは動くことができず、気持ちが不安定な時はなかなか次の日課に移ることができなくなっていた。一度日課が崩れると、その後も影響を及ぼし、一日気持ちが不安定のまま過ごすことになり、その結果、行動障害を引き起こすことにつながってしまっていた。自傷、他害などの行動が起こると、本人も職員も心身ともにしんどくなり、日課を立て直せないまま、ピリピリとした空気の中、行動障害が立て続けに起こってしまうという悪循環に陥ってしまう。

特化チームになってからは、小集団で同じスケジュールで動くため、少々気持ちが不安定でも他の利用者が動く姿を見て、同じように動けることが多くなった。また、一人の職員だけではなく、複数の職員がいるため、職員としても一人で対処しなくても他の職員と役割分担しながら、利用者の気持ちを立て直し、元のスケジュールに戻すことができるようになった。

【これまでとの変化】

3名のプロフィールと特化チームが創設される前までとの変化を見ていきたい。

プロフィール

	Aさん	Bさん	Cさん
年齢	20歳代	20歳代	20歳代
性別	女性	女性	男性
療育手帳	A	A	A
障害支援区分	6	6	6
行動障害	自傷行為 他害行為 破壊行為 大声奇声 激しいこだわり 粗暴行為	自傷行為 他害行為 破壊行為 大声奇声	自傷行為 他害行為 破壊行為 大声奇声 ズボンずらし 多飲水 激しいこだわり
てんかん	あり	なし	あり

行動障害の軽減

行動障害の頻度や時間帯などを分析するため、スキッタープロットを用いて毎日行動の記録を行っている。今回、行動障害の中でも特に自傷他害に着目してみた。回数については日々変化があるため、月単位の回数を用いた。

	これまで (H30年5月)		特化チーム (R4年5月)	
	自傷	他害	自傷	他害
Aさん	70回/月	10回/月	→3回/月	0回/月
Bさん	20回/月	10回/月	→8回/月	1回/月
Cさん	50回/月	10回/月	→7回/月	1回/月

Aさん…対人緊張が高いため、視界に入った人によって攻撃的な言動をとり、一触即発の状態が集団生活を送っていた。本人が安心して過ごせる場所や人を整備したことで、自傷他害行為は激減した。環境整備でかなりの予防ができていることと、行動障害に発展しても、複数の職員で対応できることなどで気持ちの切り替えが早くできるよ

うになり、行動障害の激しさを抑えることができるようになった。

B さん…自傷が常時といってよいほどあるので、回数についてはパニックを伴うような激しい自傷を 1 回と数えている。自傷が続くとどんどんエスカレートし、出血するまで叩き続けるため、早い段階での介入が必要である。集団の中ではタイムリーに介入することが難しかったが、特化チームでは早期に介入し、気持ちを切り替える支援をすることができるため、出血するまでの傷になることはほとんどなくなった。

C さん…感情の起伏が激しく、一度怒り出すと激しく執着して、人を噛まないと収まらない他害行為が続いていた。感情が高ぶる前は行動が速くなる傾向があり、普段の行動のスピードをコントロールすることが課題であった。しかし、集団の中ではずっと傍についておくことは難しく、予兆があっても防ぐことができなかった。特化チームでは、できるだけ穏やかに過ごせるように、いらいらが募ってきている時は特に、ゆっくり行動できるように職員が傍について促した。それによって、激しい自傷他害は軽減した。

作業時間の増加

当センターでは、どんなに障害が重くても、働いて工賃をもらい、社会参加するという、「働く」ことに重きをおいた考えのもと、一人ひとりに合った作業種や作業時間を提供できるように日々支援をしている。特化チームの対象利用者も同様の考えでこれまで各班で作業をしてきたが、落ち着いて過ごせることを

優先し、作業に重きをおくことができていない状況であった。特化チームになってからは、午前中は作業をすることを徹底して支援をした。

	これまで		特化チーム
A さん	0 時間/日	→	2 時間/日
B さん	0.5 時間/日	→	2 時間/日
C さん	0.5 時間/日	→	2 時間/日

A さん…これまでは、手先の不器用さから作業がうまく進まず、イライラして情緒が安定しないことが続いていたため、作業ではなく個室で本人の好きな色塗りや貼り絵などをしながら、横になったり座ったりと本人の好きな姿勢で過ごしていた。

特化チームになってからは、作業中は寝転がれるスペースは作らず、机に向かって足を下ろしてきちんと座るようにした。作業内容は本人が得意であるハサミで紙を切ったり、貼ったりするアート作業に取り組んだ。今では職員が傍につかなくても、午前中は一人で集中して作業に取り組むことができている。

B さん…これまでアート作業を行っている班で、職員が持つスタンプを上から押すという方法で作業を行っていた。完全にマンツーマン対応でないと難しいため、集団の中では待ち時間も多かった。1 人で待っている間は、ソファールに行ってしまう、上靴も靴下も脱いであぐらをかき、こめかみを叩いたり、髪を抜く自傷行為につながっていた。特化チームになってからは、本人の作業能力に合わせて、複雑な

作業ではなく、単調なネジにパッキンをはめていく作業を提供した。手先が不器用なため、治具を作成してパッキンを奥まで入れられるように工夫して取り組んだ。作業時間中はあぐらも組まず、靴下も上靴も履いて、きちんと座って取り組むことができている。

C さん…鉄の棒にゴムパッキンを入れていく作業に取り組んでいる。これまでは作業時間中、座って取り組めることを優先し、一定量をこなすだけで終わっていた。特化チームになってからは、枚数やスピードも向上し、また、途中でズボンをずらしてしまったら、ズボンを上げ直してもらい、服をきちんと着ることも徹底した。

ったため、生活リズムを立て直し、日中の活動量を増やすことを優先した。これまでは午後は眠ってしまうことも多かったが、特化チームになってからは、日中に眠ることもなくなり、健康的に体を動かした結果、活動量が増え、食欲も増したと考えられる。

A さんについては、特化チームが始まってから半年間は体重が減少したが、R3 年 9 月以降、徐々に体重が戻ってしまっている。

当センターは通所事業所であるため、帰宅後や休日の食生活が本人の体重に大きく影響する。もともと過食や多飲水がある方たちであるため、家族の協力や連携が長期に渡って必須であると感じている。ただ、行動障害があるため、簡単に家庭で食事量や水分量をコントロールできるわけではない。その大変さを理解した上で、家族の協力やモチベーションを保てるよう家庭と密に情報共有し、連携をとっていく必要がある。

体重の変化

	体重 BMI (R3 年 4 月)		体重 BMI (R4 年 8 月)
A さん	83.8 kg	→	84.7 kg ※76.2 kg(R3 年 9 月)
	37.24 肥満 3 度		37.64 肥満 3 度 ※33.87 肥満 2 度 (R3 年 9 月)
B さん	92.6 kg	→	81.9 kg
	35.75 肥満 3 度		31.62 肥満 2 度
C さん	54.9 kg	→	59.6 kg
	20.18 普通		21.91 普通

A さんと B さんは肥満であり、減量も大きな課題であった。毎日の規則正しい日課や山登りの成果もあり、かなりの体重減少につながった。

C さんについては、そもそも肥満ではなか

【考察】

生活介護の 3 つの班では、激しい行動障害のある方への支援が求められていたにも関わらず、職員の経験年数等によっては対応が難しい場合も多くあった。その場しのぎの対処療法的な関わりになってしまうこともあり、いつ行動障害が起こるのかと、現場は常にピリピリした緊張感が張り詰めていた。職員も対応方法がわからず、支援の迷いや停滞につながり、退職や退職に至ってしまったこともあった。対応できる職員が限定されるに従って、その職員の精神的負担も増す一方であった。利用者にとっても、十分でない支援体制の中で安心できなかつたり、対応する職員によって支援が違うなど、混乱の原因にもなっていた。この流れをなんとか変えられないかと話し合いを重ね、令和 3 年度から試行的に現在の特化チームの形を始めてみた。

特化チームを始めるにあたって、いくつかの心配する声があったのも事実である。まず、

激しい行動障害のある人たちを同じ部屋にグルーピングするということは、一人が不穏になった時にその他の人まで影響を及ぼし、不穏の連鎖にならないのかといった心配があった。それについては、たしかにお互いの声や動きは影響を及ぼすが、ネガティブな連鎖だけではなく、グループダイナミクスのようにポジティブな連鎖もあるため、よい意味でお互いに影響しあっているのではないかと考える。

次に、特化チームに職員を手厚く配置する分、その他の班が手薄にならないかといった心配があり、試行しながら生活介護グループ3班の職員に意見を求めた。たしかに、以前と比べると各班とも職員体制は厳しくなったが、それぞれの班の一番激しい強度行動障害の利用者が特化チームで集中的な支援を受けていることで、これまで各班では支援しきれなかったことができていくことに好意的な意見が多く聞かれた。また、対象利用者の変化に驚きと希望をもった職員の声も多かった。

そして、部屋や日課が新しくなるという大きな環境の変化に対し、本人や家族も不安にならないかといった心配については、試行を始める前に、特化チームの趣旨をしっかりと伝え、対象利用者全員から快諾を得ることができた。本人にはこれまでいた部屋を卒業するという意味で、卒業式を行い、新しい生活になるということの見通しをもってもらった。

このように、特化チームを始めるにあたって、様々な心配や不安がなかったわけではない。それでも目の前の利用者としてしっかりと向き合いたいという強い思いのもとスタートさせることになった。

職員の心配事をよそに、試行段階の令和3年度のスタートは意外なほどにスムーズだった。「最初が肝心」と職員同士でしっかりと情報共有し、一貫した支援を徹底した。利用者も迷いのない私たちの支援に安心したのか、新しい環境でも落ち着いて作業や活動に取り

組むことができた。私たちが思い描いた強度行動障害支援の「急性期」としての集中的な支援、徹底したチーム支援が実践できたと考える。そして、令和4年度からは、正式に当センターの生活介護に「強度行動障害支援特化チーム」としてスタートさせた。試行から2年目に入り、1年間で積み上げてきたことを基礎に、地道で根気強い支援を続け、利用者のさらなる生活の安定を目指している。現在を強度行動障害支援の「初期」の支援と考え、日々、記録をとりながら、それぞれの利用者の障害特性に応じた支援のあり方を分析し、実践、検証を繰り返し、支援方法を確立していく時期だと考える。

そして、今後の特化チームの課題の一つとして、特化チーム以外の職員とも同じように利用者が落ち着いて生活できるように、支援者を広げていく必要がある。強度行動障害支援の「中期」の時期と考え、確立した支援を引き継ぎ、支援者を育成、拡充していかなければならない。そこには生活介護3班の職員の協力が必須であるため、現在少しずつ支援者を広げていけるように支援方法を伝達したり、直接現場の中でサポートしながら取り組んでいるところである。

支援方法を確立し、継承していくことで、どの職員も安心して支援できることが理想である。職員の緊張感を利用者はすぐに察知する。これまでは、どう支援したらよいかかわからないという困惑を職員が抱え、その緊張感が利用者に伝わっていたのだろう。特化チームになってからは、複数の職員で対応できる安心感が職員にある。その安心感は利用者にも伝わるため、利用者にとっても特化チームが穏やかに過ごせる安全基地となっている。

特化チームになってから、しんどいはずの毎日の山登りに、利用者も職員も楽しそうに出かけて行く姿がほほえましくもある。山で虫探しをしたり、捕まえた虫を育てたり、利用者も職員も楽しさを共感できる心の余裕ができ

たことが何よりうれしいことである。

そして、強度行動障害支援の「後期」の支援として、いずれは元の班に戻り、マンツーマン体制で対応しなくても、みんなと同じ空間で作業をしたり、活動プログラムを楽しんだり、充実した生活を送れることを目指していきたい。